

人と住まいを近づけるニアテクをめざす —URCの可能性

インタビュー／海野健三さんに聞く

小さな事務所で生まれた大きなURC

編 URC工法はコンクリートの型枠のかわりにネットを使うという、目から鱗の発想が源ですが、開発のきっかけを教えて下さい。

海野 阪神淡路の震災で、建築家として何

かできることはないかと考え始めたことですね。

もし私が震災に遭ったなら自分で家を

建設するだろう、じゃあセルフビルトできる

シンプルな仕組みを開発できないだろうか、

と思ったわけです。まず最初は普通に木造

を考えたんです。けれど木は加工しやすい

利点はあっても耐震性をもたせようとする

素人には向いてしまう。2×4も簡単で

良いと思ったけれど、組み立てていくだけじ

や、こちらの考えがなくて面白くない(笑)。

じゃあ木造が駄目ならRCはどうだろう、と思

ったんですね。実際私はそれまでRC造を

やったことはなかったんです。夏暑く、冬

が寒いあまり居住性が良くないと思っていたから。

また、セルフビルトにも向いていない

と思っていましたが、当時丁度断熱のこと

を勉強していて、外断熱のRC造ができた

ならその将来性が無限にあることを感じ始めたんです。そしてそれをセルフビルトでき

▼事務所で行った強度試験



たら面白くなるぞ、と。

実際にコンクリートって1立米あたり1万円ですごく安いし、DIYなどのショップで鉄筋も何でも簡単に手に入る、すごく身近なものなんですよ。セメントを練るのはミキサー車に来てもらえばいいし。

編 どこか他の組織と提携して開発したんですか？

海野 いや、所員に手伝ってもらうことはありました。私が一人です。ネットを引っ張ったりいろんな金物を試作したりして、少しづつ開発しました。そして理解ある建主の登場で実際に使う機会を得ましたが失敗を恐れなかったわけではありません。その重圧感は大変なものでした。もしもの時は責任をどうとればいいのかわかりませんでしたが、間違なく建築家生命は終わりになると思っていました。その辺の心境が誰にも分かるものではなく孤独でしたが、自分の命の可能性を追求することでもありました。

ネットが使えると思ったのは色々なモノックをつくって実際にコンクリートを打ち込んでみている時に、コンクリートを押さえられるだけならかなりいい加減なものでいいのだ、というのが実感で分かりました。それならひょっとしてネットでもいいのではないかと思ったのです。そしてどんなネットがあるのか調べ始めたわけです。

工法を開発するというのはとても大掛かりなことに聞こえるけれど、アイデアが生まれてから半年位、ネットを引っ張ったり、色々な金物を試作した結果です。URC工法は外断熱RCが手軽にできることが特徴です。使う材料も軽いものばかりで運搬も楽、組み立ても楽。そして組み立てたものを撤去せず、そのまま外壁仕上げの下地になることが合理的です。軽量で無駄もなく、確実です。型枠工法だけでなく、鉄筋工事も非常に楽になりました。また、ネットによる余剰水の排出がコンクリートの高強度、ひび割れ防止にもなり同時にテクスチャーに

あたたかみを与えています。

このように多くの長所があるけれど、私のような小さな事務所でも開発できた工法だということも大きな意味があるんじゃないかな。ただ、一つだけ難点があるんです。この安全性がどの位なのか、数値的な保証がないということ。僕自身色々試してみてこの型枠はかなり安全なものであることは分かっていますが、その安全性の数値を出していないということです。客観的な保証がないまま人に使ってもらうということは重大な過失になるんじゃないかなという懸念があります。安全性の確認を図るために作業はかなりの費用がかかるのだろうと思いますが、加えてその費用がないということが今一番悩んでいることです。

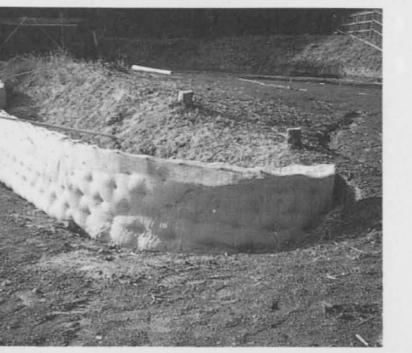
セルフビルトは一つの生き方

編 実際にこの工法でセルフビルトしようとしている人はいるんでしょうか？

海野 今は二人ほど挑戦していますよ。一人は年内に100坪の住宅をつくるって意気込んでいる(笑)。その前に様子を見るために、塀をつくってみたらしいんです。写真を見せてもらいましたが、これが実に面白い表情に仕上がっている。高さ1m、長さ30mのものを一人で一週間かかったらしいけど費用は5万円でできたと言っていました。

ブロックでつくりていたらつまらないし、費用も50万円以上かかるはずです。現場近くで見ていた土建屋さんも、びっくりしていました。今はプランもできあがりつつあります。ディテールを試行錯誤しているみたいです。

本当に基本のシステムしか教えていなかったので、彼らは作業中ちょっとでも疑問が出てくると全部自分で工夫してしまうんです。例えば開発した支持金物を使うと適當なかぶり厚さが得られるから具合がいいんだけど、自分で工夫しなきゃ気がすまないっていってビニールホースを代用してセバをとめてたこ



▲セルフビルトによるURCの壁。しづのより具合による表情が各々で異なる

いいな、と思っているんです。例えば家をちょっと補修しなければいけない時、ローテクでできた家だと建築家が介入せずに、建主さんが自分の手で簡単に直せるでしょう。

「ちょっと直す」ということの延長は、「ちょっとつくる」ということなんですよ。

もう少し具体的に言うと、今、コンピューターを皆使っているけれど、内部構造がどうなっているか知っている人は少ない。これからはそのような仕組みが見えないけれども、生活必需品になる道具がもっと増えてくると思うんです。ただ、そういうものの全部に囲まれると生命が浮いてしまうと思います。いくらやっても夢の中のようで実感がない。実存がない。生命の基盤がつくれないと感じます。人間が脳ミソだけのものになってしまいます。住宅までそういう風になってしまってはいけない。人間と一緒にとなるべくもっと近くになくてはならないと思います。それにはやはりローテクの優しさがふわわしい。

確かに時代を進めていく技術は必要だと思いますよ。ただ全部が全部そうだたら人間が取り残されてしまうから、音楽や絵のような五感に訴える芸術はいつまでも残っているんでしょう。住宅も音楽と同じような、いつでも手の届く範囲にあってほしい、それを言葉で言うと、「ローテク」ということになるんです。

その辺にいる方が気持ちが落ち着けて安心感がありますよね。そのためにはビニールクロスやタイル貼りなんて、つまりは嘘の表現だし仕組みを隠蔽してしまう素材は使いたくない。安くとも本物がいいんですよ。

編 「焼草庵」では自然の草、鉄、コンクリート、木、和紙など、決して高級品ではないけれどもあるがままに使われていますね。

海野 そう。人間は本来は動物だから、ある程度有機的なところに身をおいた方が、精神的な安定が得られるんじゃないかな。安定が得られると幸せな感情が生まれるし、そうすると人間と人間との繋がりも生まれやすくなる。

そういう意味では住宅ってもっとローテクで、もっと人に近く、だらしないものであっていいんじゃないでしょうか。例えば、URCと鉄骨のとりあいでネットからコンクリートがはみ出した跡をそのまま残しているのは、変にかこまらずに、気持ち良くあるがままを受け入れてくれる空間をつくりたかったから。

ハイテクは便利さは与えてくれるけれどローテクノロジーの技術の方がかえって人間を氣

持ち良してくれるのでかもしれません。ローテクというとローの低いという語感が面白くないので、人に近いという意味で「ニアテク」とでも言った方がいいですね。ニアテクというのはとても素晴らしいこと。私がドアノブを石にしたのはまったくのニアテク。だってメーカーがつくるような普通のドアノブなんて、押し付けがましくて面白くないじゃないですか。小さい頃からああいうものを見て育ってしまうと変な固定概念ができる、別のものを使おう、何か新しいことをしようと常に失敗するんじゃないかなという不安が生まれ、自然とメーカー信仰になってしまいます。これじゃちょっとつまらないですよね。

今、建築は、つくるという原点を少し見失っているのかもしれませんね。半ば工業生産品になっている部分があるでしょう。技術の工業化はもっと進化してもいいかもしれないけれど、「住宅」はまだまだ一品生産、手作りのよさというものが残っている分野だと思います。色々なものが手づくりの良さを失いつつあるけれど、住宅だけは失いたくないな。ものづくりを、生きるということと同じように考えられればいいですね。人間の気持ちが豊かになれることが大切なに、今のこどもたちを見ていると本当の人間の豊かさが失われているような気がします。それを取り戻そうとするとき、技術と人間のかかわりあいかたというのはかなり大きいんじゃないかな。

今は新しい技術のしっぺ返しが少しきている時かもしれない。本当にどういう技術がいいのか、ようやく考えられ始めた頃だと思うんですが、技術が技術として存在するだけではなく、心の豊かさと融合していく、その結果として建築が生まれてゆくといいですね。

(文責=編集部)

▼焼草庵ドアノブ/表面は磨かれており、又意外と重くない。

